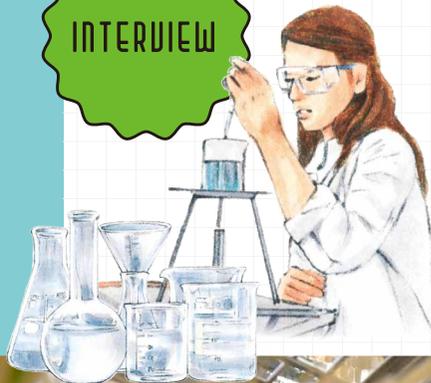


INTERVIEW

研究室のススメ

K E N K Y U U S I T S U N O S U S U M E

ダイナミックで、シビアナ研究環境で知られるアメリカの大学・研究機関でサバイバルし続けてきた白須氏。研究者にとって大切なのは「人とのコミュニケーションを通して自らの研究コンセプトをシェイプしていくこと」と話します。白須氏の現在に至る足跡について伺いました。



自分の器を広げてくれた。
学びと体験が、
研究室での



理系ゼミ出身

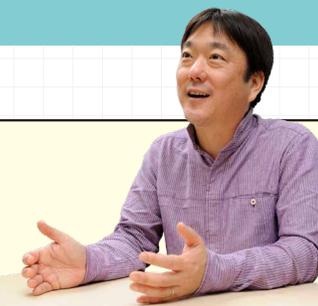
独立行政法人理化学研究所 環境資源科学研究センター 植物免疫研究グループ グループディレクター

白須 賢

しらす・けん

東京大学農学部農芸化学科卒業。カリフォルニア大学デービス校にてPh.D（遺伝学）取得。米国ソーク研究所・ノーブル研究所博士研究員、英国セインズベリー研究所研究員及びグループリーダーを経て、2005年より現職。2008年より東京大学大学院理学系研究科・教授（兼任教員）。

文系研究室出身の白須さんに聞きました!!



1 回り道をした経験が 今の研究に活かされている

SUSUME

私が大学に入学した1980年代初頭はちょうど分子生物学が認知され始めた頃でした。もともと植物学に興味があったので、植物学の分野で分子生物学的なことをやってみようと思い、植物と微生物を両方学べる農芸化学科に入学しました。ところが、3年次後期に所属研究室を決める際、植物学系の研究室で分子生物学をやっているところがなく、微生物系

の研究室に入ることになりました。そこではあるプロジェクトを手がけることになっていましたが、ちょっとした手違いで当初の予定とは別の、タンパク質精製のプロ젝トに回ることになったんです。遺伝子を扱うわけではない泥臭い研究でしたが、そこでタンパク質のイロハを学べたことは現在の研究にも大いに役立っています。

2 「考える」ことの大切さを 教えてくれた恩師の言葉

SUSUME

学部卒業後、「どうせ分子生物学をやるならアメリカで！」と決心して、カリフォルニア大学デービス校に入学しました。アメリカの大学院は日本とは違って、1～2年は幅広い分野の最新知識・技術を徹底的にたたき込まれます。試験の連続で、私は落第ギリギリで何とかクリアしましたが、今、他分野の論文を読んでも理解できるのは、その2年間で培ったベースがあるおかげだと思っています。

カリフォルニア大学の研究室での経験で印象的だったのは、私が夜遅くまで実験を続けていた時、教授に「考えないで実験するなら、1～2ヶ月ビ-

チに行ってこい。そうしたら今やっている実験がムダだと分かるはずだ」と言われたことですね。つまり、「考える」ことが大事で、考えないでダラダラやって働いた気になるのは止めなさいということです。それ以来、「Hard Working と Hard Thinking を一緒にするな!」をモットーに研究に取り組むようになりました。また、ポスドク（博士研究員）として勤務した研究所では、シビアナ研究環境でサバイバルすることを通して、自分でテーマを探し、プロジェクトを構築していく力を養うことができました。

3 植物が病原菌を撃退する メカニズムを解明

SUSUME

深刻化する食糧問題の解決策として期待されるのが、病原体に対して強い耐性を持つ作物の開発です。そのために、私が所属する植物免疫研究グループでは、植物がどうやって自らの身体を病原体から守っているのかというメカニズムを遺伝子レベル、タンパク質レベルで解明しています。植物は環境の影響を受けやすく、2～3万個もある遺伝子を1つずつ解析していくのはとても時間とエネルギーのいる作業ですが、新たな「発見＝DISCOVERY」に出会った

時の喜びはとても大きいものです。今後はアフリカで大問題となっている寄生植物に関する研究プロジェクトにも力を注いで行く予定です。

私の研究室ライフを振り返ると、一貫して自分の器を広げる作業だったと考えています。自分の将来や進路を考える時、今は選択肢がたくさんあり、大学も日本だけじゃありません。自分の器を広くしておけば、チャンスを手にする機会も広がるはず。そのためにも、研究室での学びや体験を大事にして欲しいですね。